



## 善意に支えられて

昨年に続き、利用者のFさんからシンビジュームの鉢植えをいただきました。正  
面入口を入ったところに置いています。ラン科の花は艶やかで場が華やかになりま  
すね。ありがとうございます。たくさんの方に協力や支援をいただいて図書館は運営  
されています。感謝の心を忘れず、職員一同さらに明るい雰囲気作りに取り組んでま  
いります。

### ❖ ポーランドという国

ポーランドという国についての一般的なイメージはどんなものでしょうか。私に  
とっては、ショパンの祖国、広々とした平原の国、西から東から何度も攻められ国家  
が消滅した国、「連帯」のワレサ議長（のちポーランド共和国大統領）、それからア  
ウシュビッツといったところ。そしてなにより、海外ジョーク集などで揶揄されてい  
るポーランド人の頑固さや愚かさが頭を離れません。

最近付け焼刃のお勉強をして大幅なイメージの修正を余儀なくされました。まず  
国土の面積。日本よりずーっと大きいと思い込んでいましたが、なんと日本の方が広  
い。日本の37万平方キロに対し、ポーランドは31万平方キロ。ちゃんと世界地図  
を見れば分かることなんですけどね。そして、ナチスのホロコースト前には世界最大  
のユダヤ人社会がポーランドに存在していたことも初めて知ったことでした。

頭が悪いというのも、とんでもない。教育への熱意は高く、大学進学率は日本を圧  
倒しています。ポーランド出身の歴史的有名人をあげてみても、尊敬に足る国である  
ことは明白でしょう。順不同で、コペルニクス、キュリー夫人、エスペラント語のザ  
メンホフ、アウシュビッツの聖者・コルベ神父、ヤヌシュ・コルチャック（コルチャ  
ック先生）、第264代ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世、映画「地獄の黙示録」の原  
作である『闇の奥』のジョセフ・コンラッド、『ソラリスの陽のもとに』のSF作家  
スタニスワフ・レム、映画監督のロマン・ポランスキーやアンジェイ・ワイダ、音楽  
ではショパンはもとより、ピアニストで第一次世界大戦後に独立を回復したポーラ  
ンド共和国の首相になったパデレフスキ、第二次大戦後輩出した作曲家たちのクシ  
シュトフ・ペンデレツキ（「広島犠牲者に捧げる哀歌」）、グレッツキ、ルトスワフ  
スキなどなど。

それもこれも須賀しのぶの『また、桜の国で』（祥伝社、2016年、中央・比内  
図書館蔵）を読んだせいです。

主人公は棚倉慎（まこと）。帰化した亡命ロシア人を父に持つ慎は日本国籍ながら  
スラブ系の風貌で、戦前の日本では子どもの頃からいろいろ難しい立場にあったこ

とは想像に難くありません。外務省の書記生となった彼がワルシャワの大使館に赴任したところからドラマは幕を開けます。時あたかもナチスドイツが近隣諸国の併合を進め、ポーランドへの侵攻も間近い頃です。

ところで、第一次世界大戦後の1919年、流刑でシベリアに送られたポーランド人たちの子孫の子どもたちが、シベリアに取り残されるという事態が発生しました。国際社会が手をこまねく中、日本の外務省と日本赤十字社が動きます。日本に彼等を受け入れ健康を取り戻させた上で、延べ千人近い子どもたちが、英米を経由してポーランドに帰国しました。杉原千畝のみならず、今は知らず戦前戦中には気骨のある外交官がいたことを教えてください。

慎は幼い頃、父が蓄音機でかけていた音楽を聴きたくて庭に入り込んでいた「シベリア孤児」の一人と知り合います。曲はショパンの「革命のエチュード」。幼い頃の、そして大人になってからの、ポーランド人との奇しき縁で結ばれた信頼や約束を違えぬため、危険を顧みず自らの信念に基づく行動を貫く慎。実際のワルシャワ蜂起（1944年8月）やレジスタンス活動の動きに沿った物語にページを繰る手が止まりません。

この『また、桜の国で』は、この19日（木）に決定した第156回直木賞の候補作にもノミネートされていましたが、惜しくも選に漏れました。それにしても今回の5人の候補者、すごい顔ぶれでしたね。大館市立図書館全体で須賀しのぶの所蔵は全15件。コバルト文庫出身で、上智大学史学科卒、歴史（特にドイツ）・軍隊・野球が好きという須賀さん、いずれ更なる歴史物の傑作をものしてくれるに違いありません。

#### ❖ 2月のロビー展示は蒼杉会

恒例となった中央図書館2階の「図書館の中のちいさな美術館」。2月は「蒼杉会小品展Part 2」です。1日（水）から28日（火）まで。実力派揃いの面々の力作をどうぞお楽しみに。（陽）